

八つのほこりの教えから

天理教では、悪しき心遣い^{ほこり}が埃になぞらえて教えられる。それが「をしい（惜しい）、ほしい、にくい、かわい、うらみ、はらだち、よく、こうまん（高慢）」からなる「八つのほこり」の教えである。これら悪しき心遣いはいずれも心理学の対象になりうると同時に、悪しき心遣いであることによって倫理学の対象にもなる。そして、この教説が天理教の教義として語られることで、教義学の対象ともなるのである。

信仰熱心な人が陥りやすい陥穽^{かんせい}は、教義学こそ重要だと思いついで、心中悩んでいる人に直接的にいきなり教義の言葉で語ろうとするとところにある。しかし、そんなことをすれば、せっかくの言葉も悩める人の心に届かず、下手をすれば逆に心の傷口に塩を塗ることにもなりかねない。宗教は心の救済をもたらすものであるが、救済を受け入れる状態へと心のあり方を整える必要がある。そうした時に心理学が有効になる。また、教えが広く人の世に通用するためには、善悪の基準を考量する倫理学も欠かすことができない。

心理学・倫理学・教義学は、それぞれが別個の独立した学問である。どれか一つの学問に還元されたり、相互の従属関係に置かれたりすべきものではない。ここで求められるのは、心理学・倫理学・教義学を俯瞰することのできる一つの大きな視野の学問、すなわち人間学である。

『不安の概念』の人間学

そのような人間学的探究を、キルケゴールは『不安の概念』の中で行っている（彼自身は人間学という言葉は用いていないが）。この著作の副題は、「原罪という教義学的問題に向けて心理学的示唆を与える一考察」である。テーマはあくまでも「不安」の概念であるが、罪自体は心理学のテーマではないし、まして原罪に至っては心理学とは無関係の問題である。あえて罪が問われるとすれば、それは倫理学においてであろう。そして原罪となると、これは教義学（神学）が扱う。

しかし、「不安」という心的状態には、心理学・倫理学・教義学の問題領域が含まれているというのが、キルケゴールの見立てである。『不安の概念』では、心理学から倫理学を経て、教義学の問題を引き渡すという構成を取ることが序論で示される。しかし問題それ自体は、その本性上、逆に教義学から倫理学を経て、心理学にもたらされるものである。罪という問題が^{ディスクリメン・レールム}かかる境界領域にあるがゆえに、これを扱うにはこれら3つの学問の反復的往復運動が必要なのである。

実際、『不安の概念』は心理学的探究と称しながら、第1章でいきなり「原罪」論から始めている。しかし、そこから始めなければ、不安というものが説明できないのである。なぜなら、原罪はアダム（これは同時に人間をも意味する）の墮罪とともに始まるが、墮罪以前の無垢の状態（エデンの園）にあつて、アダム（人間）はずでに不安に陥っているからである。精神はまだ可能性の中にまどろみ、善悪を識別する能力を持たない。まだ何も起きていない、いわば無の状態がそこにある。しかし、この無が不安を呼び起こす。不安とは、「可能性に先立つ可能性」として「自由の現実性」だからである。ここで初めて、不安と

いうものが人間の自由と関係することが説かれる。

そして墮罪が起り、この質的な飛躍によって罪はこの世に入ってきた。罪はまたそのようにしてたえず世の中に入りつつある。我々一人ひとりが現実のアダムなのだ。そして、不安も自由との関わりでたえず生じる。人間は霊的なもの（心）と肉体的なもの（体）の総合であり、この総合は精神においてなされるわけであるが、目覚めた精神は自由なるがゆえに、たえず心と体の関係をかき乱していくのである。

自由の眩暈から反復＝出直しへ

高いビルの上から街路を見下ろすと、眩暈^{めまい}がし、足が竦^{すく}んでしまう。高度そのものが恐ろしいのではない。なぜなら、それよりずっと高いところを飛ぶ飛行機から眼下に広がる街区を見下ろした時には、そのような眩暈は感じないからだ。自分が足場の上に立って自由に動けるといふことそのことが、逆に眩暈を生ぜしめてしまう。不注意で、もしくは故意で落下してしまうのではないか。それが眩暈の元である。心の中には客観的な高さは存在しない。その意味では無であると言えるが、その無とは自分が落ちてしまうのではないかという可能性である。これが不安の正体なのである。

キルケゴールは、不安とは自由の眩暈であると言う。不安は可能性とともにある。現実性の中で不安は現実的可能性となる。しかし、この不安を抱くことは、人間が人間である以上、だれもがやり遂げなくてはならない冒険である。なぜなら不安は自由の可能性であり、人間の本質は自由にあるからである。不安によって教化されるものは、可能性によって教化される。不安にさいなまれることは確かに苦しく、不幸なことであろう。この不幸を嘗めつくすことによって、人は一切を失うかもしれない。しかし、そのことによって可能性を得ることができる。可能性とは無限性でもあるがゆえに、人は再び一切を取り戻すことができるのである。

ここに、反復、すなわちゲンテーエルセ Gjentagelse（やり直し、受け取り直し）のテーマが再登場する。人生とは人生を受け取り直すことであり、この受け取り直しの契機がなければ、人生は真の意味での人生にはならない。これを天理教の教語で表現すれば、「出直し」となる。出直しは死と同義に語られることが多いが、それは派生的な意味であつて、本来はそうではない。それは象徴的に死を体験すること、一切を失うことで一切を取り戻すことなのだ。「みかぐらうた」に「こゝろえちがひ（心得違い）はでなほし（出直し）や」と歌われるが、拳を握って腕を振って一回転して元の位置に戻るのが、「出直し」の手振りである。反復、すなわち出直しのない人生は人間らしい人生ではない。そして人間が人間である限り、出直しはいつでも可能である。それは人間がその本質において自由であり、不安に鍛えられることで人間の可塑性が形成されるからである。

『不安の概念』という著作は、それ自体がすでに心理学・倫理学・教義学による反復＝出直しの三重奏である。本書の最後に、不安の探究は、その探究が始まったのと同じ場所で終わることが宣言される。心理学的探究が終わったところで、不安は教義学に引き渡される。すなわち、もう一度同じところで探究の仕方を変えて出直すのである。